

《 1. 弾道ミサイル飛来を想定した訓練を実施します 》

**記者** 弾道ミサイルの訓練ですけれども、これは、ほかの小学校とか企業とか町なかとか、今後、ほかの場所でも予定はされていますか。

**市長** 今のところは大在小学校だけです。そして、その経験、訓練の結果をほかの小学校、中学校、いろいろなところに周知をしまして、訓練の経験をほかのところもしたのと同じような効果を持たせるように、周知徹底をしていきたいと思っております。

**記者** 訓練自体はしないということですか。

**市長** しません。

**記者** 訓練結果は共有するということですね。

**市長** はい、そうです。

**記者** ミサイルの飛来訓練についてですけれども、どうしてこのタイミングで小学校でやるのかという意義については。

**市長** タイミングは、やはり今、大変不透明といえますか、いつ、何があってもおかしくないような状況になっていると思いますので、やはりできるだけ早くやるほうがいいということで、いろいろな関係者と話をしています。

そして、小学校でやるのは、子どもたちが校庭で遊んでいるという状況で被害を防ぐためには、やはり学校の中に逃げ込むというのが一つの避難のパターンとして非常に有効な形だと思われるためです。

周知はホームページであらゆる方々に向けて行っているのですが、実際に見える形で訓練をすることによって、問題意識を持っていただいたり、何か起こったときにどういう行動をすればいいかを考える方が少しでも増えていくと考えています。

ちなみに、今、ホームページのトップページに、飛来物が来たときの対応を載せています。例えば、防災無線のサイレンがどういうふうに聞こえるか、クリックしてもらいますと「ブーン」という音がするのですが、こういう音が鳴ったときは危ないんですよということを分かっていただけるように、できるだけ工夫してホームページに載せてはいるんですけども、やはりそれだけだと不十分なところもありますので。

また、地震のときに、震度3以上で防災メールが入りますね。飛来物が来たときにも同じように入りますので、そういうところも周知徹底をしないといけないと思っています。

そういう情報とあわせて、こういう訓練をしてこういう対応をしましたということを発信して、例えばこのあたりを歩いていて、飛来物が来ることが携帯の防災メールで分かった瞬間に、どこでもいいですから、近くのかたい建物の中に逃げ込んでもらう、そういうことを狙っております。

**記者** このミサイルの飛来訓練というのは、県内では初めてですか。

**市長** 県内で初めてです。もう1カ所、日田市も予定しています。

**記者** 分かりました。

## 《 2. 自動運転バスの実証運行を実施します 》

**記者** 自動運転バスの実証運行は、大分市では初めてということでしょうか。

**市長** はい。初めてです。

**記者** こういった自動運転バスを実証していくことの意義や必要性を伺えればと思います。

**市長** 二つありまして、一つは、自動運転が未来の交通体系に大きな役割を果たすということです。大分市地域公共交通網形成計画の中でも、特に交通弱者がたくさんいるようなところの公共交通のあり方や、今、バスの運転手が高齢化していて、大分市でも平均年齢が48歳ぐらいです。年齢構成を見ても、50歳代が4割、再雇用の60歳代が2割ということで、今後、バスの運転手の高齢化がますます進むと。こういう中で公共交通、バスの役割は高くなってきますので、問題を解決するための手段としても、この自動運転というのは大変重要だということです。

もう一つは観光です。田ノ浦地域は、大分の中でも別府からつながって、うみたまご、高崎山から田ノ浦、西大分、そして臨海部から佐賀関まで、大変風光明媚な、観光で有望な地域です。田ノ浦地区着地型観光拠点施設形成事業というこ

とで、田ノ浦はビーチがありますが、うみたまごから西大分ぐらいまでの範囲を  
どういふふうにもっと観光で魅力のあるものにしていこうかということで、今、  
調査を進めています。

この事業の一つの大きな目玉といいますか、要素に、こういう自動運転が入っ  
ていて、今回は実験ですから非常に短い期間ですけれども、これがずっと自動運  
転で観光客の足として行ったり来たりできるというのは大変魅力のあるものにな  
ります。将来の夢としますと、中心市街地ともつないでいくようなこともあり得  
ると思います。そういう観光分野での広域的な地域の手軽な移動という意味で、  
自動運転というのは大きな可能性があると思います。この点が2点目です。

観光分野と公共交通の整備という、この2点から、大変意義があるのではない  
かなと思っています。

**記者** 今回は実証運行ということですが、本格運行の時期のめどや、あるいは何  
台、何往復というような規模感を、現時点で分かる範囲で結構ですので教えてい  
ただければと思います。

**市長** 国は自動走行システムの実現と普及について、2025年をめどに高度運  
転自動化の市場化が可能となるように研究開発、実証を進めていくと言っていま  
す。ですから、2025年というのが市場化がスタートするというイメージなん  
だろうと思います。

やはり技術の問題と、あと社会システムですね。技術的には、自動運転でかな

り危なくない形で動けるということは言われていますが、何か起こったときの責任を誰がとるのかなど、いろいろな整備が必要になってきますから、大分市だけということではなくて、国も含めた制度の整備、取組が必要ですので、2025年というのが一つのメルクマールなのではないかなと思います。

**記者** 細かいところなのですが、この資料によると、12人乗れるということですからけれども、今回は6人で運行するということですか。

**市長** 席が6つしかありませんので、座っていただくということで。あと、ディー・エヌ・エーの乗務員が一人、緊急停止用に乗る予定です。

**記者** 雨だと運行できないのはどういう理由ですか。

**市長** センサーが非常に敏感なものですから、雨を感知して、障害物として認知するそうです。

#### 《その他 大分中村病院の用地売却について》

**記者** 1週間ほど前に、パルコ跡地をめぐって商工会議所の姫野会頭から、市に土地の取得を含めてご検討いただきたいという趣旨の申し入れがあったと思うのですが、そのときに、前向きな発言を市長がされていました。向こうは年内に売りたいと言っているわけですが、改めて、市長、パルコ跡地は市にとってどう有効活用していくべきかというお話を伺えればと思います。

**市長** パルコ跡地は、今は中村病院の所有地ですがけれども、まちづくりのために

大変重要な場所になると、先月の記者会見でもそう申し上げたかと思えます。6月20日に、大分商工会議所の姫野会頭と大分市商店街連合会の矢野会長の連名で、市が取得することも含めて有効活用について尽力をしてほしいという要望書をいただきました。そういう要望書をいただいたということについては、やはりしっかり受けとめないといけないと思えますので、市が取得をするとなるとどういう形になるのかということの中でも検討していますし、関係者とも意見交換しています。

大分市が公用地として土地を取得する場合はルールが決まっております、不動産鑑定士の鑑定による時価で取得をするということになります。ですから、今回のパルコ跡地の取得についても、取得をするとなると、同じルールで購入をすることになると思えます。

そして、大分市として取得した場合に、どういうことに活用するのがいいのかということの中でも議論しておりますし、学者も含めていろいろな方にご意見を伺っております。

やはり2019年にラグビーワールドカップがありますので、ワールドカップ開催に向けて、あの一角を花や緑、噴水、カフェなどを備えた広場、公園にする。そうしますと、大分駅前から見たときに、緑とか花のきれいな風景がぱっと中央通りの右手に広がる、そういうすばらしい、そして市民の皆さんの憩いの場になって、ラグビーのときには、そこをいろいろなイベントで使えるのではなか

ろうかと思います。例えば高層の複合ビルなどをつくろうとすると、今からではとても2019年の開催に間に合いません。開催のときに工事が行われているというのは、大分市が取得した場合には避けるべきだろうということで、磯崎新さんは祝祭の広場と言っていますけれども、そういう祝祭の広場を整備する。花や緑があふれていて、しゃれたカフェがある、取得するとなるとそういうことではなかろうかということです。

取得するとなると、当然、予算が必要になってきますから、議会のほうには、大分商工会議所会頭と大分市商店街連合会の会長からご要望がありましたという説明を関係の議員にしていますし、所有者をはじめ、関係者の皆さんと意見交換を始めているところです。

**記者** 市が取得するのに特段の支障が、例えば財政上の支障があるということをお考えのほうはよろしいのでしょうか。それとも、あまりそういうことはないのでしょうか。

**市長** 財政上は、もちろん価格が幾らになるかによりますけれども、想定される不動産鑑定士の鑑定による時価での取得ということで考えますと、大分市は十分に対応ができると思います。

**記者** 年内にも売却先を決めたいというのが向こうのタイムスケジュールだと思っておりますが、そういう意味ではかなり時間的にタイトだと思います。今のお話を聞くと、かなり具体的に市長の中では活用イメージができているんだらうなと思

いますが、今、庁内で検討しているということですのでけれども、いつまでに結論を出したい、方針を固めたいというお考えはありますか。

**市長** 民有地ですから、売り主である中村病院のご都合もありますし、それから、議会で予算を認めてもらわないと売買の契約ができないということもあります。そういう意味で、売り主の設定したスケジュールに合うように、しっかりと検討を進めていきたいと思います。私たちは、さきほどのような価格しか提示できませんし、それよりはるかに高い価格で買いたい人がいたらどうなるかとは思いますが、スケジュールについては議会にしっかり諮って、了解をとれば十分年末に間に合うスケジュールで対応できると思います。

**記者** 市長が表明してしまえばいいんじゃないですか。購入しますと言ってしまえば、既定路線でうまくつながっていくような気がしますけれども。

**市長** 買うとすると不動産鑑定士による時価の価格になりますというところまでは既に中村病院にお伝えをしています。

**記者** もう購入の意思を伝えているということですか。

**市長** 購入の意思ではないです。買うとすると、そういう価格になりますということですが。

いろいろなご都合とか、債権者の方もいらっしゃいますので、そういう関係者の方々のご意見も聞きながら、大分市としてもどういうふうにしていくか決めないといけません。また、議会の承認があって初めて「買います」と言えること



で、議会の承認なしに、私が先走って「買います」というのは手続き的にも言えませんので、そういうところは一方で進めていかないといけないということだと思います。

**記者** 不動産鑑定士の鑑定をされたということですか。年に1回、土地の価格とかが出ますけれども。

**市長** 通常、固定資産税の算定根拠ということでいろいろなところの路線価の鑑定というのをもらって、それで固定資産税を決めていくのですが、今回の場合は4,300㎡の中村病院所有の土地の値段が幾らかという鑑定をしてもらわないといけません、それはまだしてありません。

**記者** してもらおう予定があるということですか。

**市長** これはやはり調べないと、幾らでということにならないと思います。

**記者** 今日2時から、県で路線価の事前レクがありますけれども、それを受けて、比較的速やかに鑑定してもらおうというのは悪くはないですね。

**市長** そうですね。少なくとも幾らでということは、提示するかどうかというのは別の話ですけれども、必要な情報だと思います。

**記者** 言葉の確認ですけれども、「検討する」ではなくて、もう「目指す」という感じですか。

**市長** 決定しているわけではありませんので、「目指す」といいますか、いろいろな関係者のご意見も聞きながら決めて、そして、議会の関係者とも相談をしない

がらということになると思います。

**記者** 中心部には22街区、54街区に市有地があって、有効活用というところもまだ検討段階にあります。また、ワールドカップに、という想定があるとはいえ、また中心部に市有地なのかなという気持ちもあります。そういう意味で、財政支出への市民の方の理解というのは得られるとお考えでしょうか。

**市長** 22街区と54街区、あと荷揚町小学校跡地については、PFI、民間活力の活用も含めて、どういう活用ができるのかという調査をしております、これは本年度予算で認めていただいて進めているところですので、それは淡々とスケジュールに従ってやっていきます。

実は、どうやって活用していくかという議論はしております、例えば22街区は、6月の議会におきまして、交通結節点としての機能、ターミナル的な機能を持たせたものという踏み込んだ答弁をしておりますけれども、そういうものを少しずつ提示していきながらということもやっています。

その中で、今回、パルコ跡地が出まして、これははっきり言って、今まで大分市で検討していたものに加えて新たに出てきた検討要素です。ただ、場所としてもまちづくり全体に大きな影響があるといいますか、大変重要な場所ですし、もう一つ大事なのは、大分商工会議所と大分市商店街連合会の会頭、会長の連名で要請が来たこと。やはり私どもとしてはこれを受けとめて行動していかないといいけませんので、今までの「これを検討していかないといけないな」というものの

上に、また大変重い検討課題が出てきたということで、それに対してベストの努力をしていきたいということでもあります。

一つ一つしっかり説明をしていきたいと思います。22街区はこういうふう  
に、54街区はこういうふうにと。これはパルコの跡地の何か決断をするときと  
あわせてということにはならないかもしれませんが、それぞれしっかり説  
明をしていくということが大変重要だと思います。

**記者** どうするにしても、議会の承認が避けて通れないというか、一つのターニ  
ングポイントになると思うんですけども、議会に承認を得ることは、最短でい  
つできるんですか。

**市長** 通常の議会が9月ですから、9月がそのタイミングになります。いや、  
ちょっと分かりませんね。というのは、購入の手続がどういうふうに進んでいる  
のか、いま一つ私どももよく分からないところがあって、いつまでに締め切りと  
か、そういうものがあるかもしれません。

さっき言いましたとおり、中村病院の理事長や、債権の一番大きな大分銀行の  
頭取に、こういう要望がありましたということをお話ししてありますけれども、  
スケジュールもよく聞かせていただきながら、いつまでにどうということがあれ  
ば、できるだけそのタイムスケジュールは尊重して対応しないといけないと思  
います。ただ、通常であれば、9月に議会が開かれますので、そこがタイミングに  
なるかもしれません。もしかしたら遅いのもかもしれませんけど。

**記者** 大分商工会議所と大分市商店街連合会の連名の要望書ですが、要望書への回答も、先ほどおっしゃった議会の承認や、中村病院のスケジュールなど、いろいろ含めた上で回答されることになるのでしょうか。

**市長** そうですね。やはり要望書をいただいていますので、市としてはこういうふうに対応しますということはお答えしないといけないと思います。いつのタイミングになるかというのはありますけれども、やはり関係の方々がたくさんいらっしゃるので、いろいろ意見交換をしながら対応を決めていきたいと思えます。

**記者** 先方が年内にという強い思いがあるので、それまでには回答したいという思いでしょうか。

**市長** ええ。遅くとも年内ということじゃないですかね。年内に大分市が対応してないとすると、必ずかは分かりませんが、買いたいという方がいらっしゃるって売り先が決まるということになると思います。

当然、民間同士の取引ですから、スケジュールを延ばしてくれとか、そういうディスターブといいますか、そういうことは適当ではないと思いますので。

**記者** 売り主の機構側とのやりとりというのは、市のほうでは。

**市長** 機構側とは直接やりとりしておりません。機構側は、基本的には売り主と、関係者としては債権者のご意向というのは重要ということだと思いますけど。

**記者** 中村病院から要望書についてリアクションはありましたか。

**市長** いや、リアクションはあまりないですね。今、淡々と売却のプロセスが進んでいますというお話はありました。

**記者** もし手を挙げるようになった場合は、REVIC（地域経済活性化支援機構）に連絡というか、とりあえず市も手を挙げますよ、価格はこのぐらいでという話はしないといけないわけですよね。

**市長** そうですね。

**記者** その締め切りなどは現状把握されていないけれども、確認をして手続きをする可能性もあるということになるんですか。

**市長** どういう形で取引の中に入っていくかというのは、例えば議会に諮るとき、これぐらいの価格でということを説明しないといけないと思うのですが、そうすると、普通、競争入札というのは伏せて入れるので、結構難しいテクニカルな問題があります。どういうふうに参加していくかというのは、いろいろなやり方はあると思うんですけど、どちらにしましても、ほかにも購入されたいという希望の方がいらっしゃるすると、それと大分市の提案とか評価、あるいはまちづくりに対する考え方をどういうふうに評価していただけるかということではないかなと思います。

基本的にREVICは、売り主と債権者の判断ですと言っていますけれども、REVICも債権をやっているわけですから、その中でいろいろご意見は当然あ

ると思います。

**記者** 土地の購入に乗り出す場合は、どこか民間と組んでということではなくて、今のところは市単独で乗り出すという認識でいいですか。

**市長** そうですね。もし市が取得する場合は単独だと思います。単独以外はないと思います。

**記者** そもそもですけども、用地の取得を市長が検討される経緯というのは、あくまで要望があったからですか。それとも、もともとそういうお考えをお持ちでしたか。

**市長** もともと中村病院からこの売却のお話が出たときから、これは記者会見でも、あの場所というのは、中心市街地のにぎわいの上でも、景観の上でも、まちづくりの上でも大変重要な場所だということは申し上げてきましたけれども、そういう意味で、どう関わっていくのかということについては中でも検討はしていました。検討している過程でこういうご要望をいただいたということです。

ですから、それまで全く何も考えてなかったんですけど、要望をいただいたので突然動き出しましたということではありません。例えばまちづくりの関係の研究者の皆さんからご意見を聞いたりとか、そういうことはずっと続けていました。

《その他 伊方原発について》

**記者** 伊方原発の件です。市長は以前、万が一何かあったときに、速やかに四国電力のほうから市に入ってくるようなシステムが望ましいとおっしゃったことがあると思うのですが、それ以降、何か進展したことがあるのかということと、なければ、今後何かアクションを起こされることがあるのか、その辺をお伺いできたらと思います。

**市長** 具体的な進展はその後まだないんですけども、大分県市長会でどう対応していくかということも議論しております。また、担当者ベースでしっかり検討していこうということで、7月に大分県市長会の各市の防災担当の課長が集まって、今後、どういうふうに取り組んでいくか検討する予定にしています。

伊方原発の所長、四国電力の担当、愛媛県庁の方に来てもらって、大分市内で首長相手に説明会をしてもらいましたが、あれも実は大分県市長会で議論をしまして、これはやはり大分県市長会として知事に要請をして、そういう会を持ってもらおうということで開催したのですが、また同じように大分県市長会で議論して、どう取り組んでいくかまとめたいと思っています。

以上で記者会見を終了します。

(※出席者の発言内容については、言い違いや

重複した言葉づかいなどを整理して掲載しています。)